

## 震災2年、東北からの声



3・11から二年。

二万人の犠牲者を出した災害の爪痕は、

いまなお、被災した土地と人の心に、

刻まれたままにある。

地域の復興と生活再建を目指す日々のなかで、

人々は何を考えてきたのか。

その声を集めた――。

写真・亀山 亮

## 巻頭対談

## 赤坂憲雄 × 土方正志

(民俗学者)

(出版社「あらえみし荒蝦夷」代表)

## 僕たちは何を見てきたか。

〈東北学〉提唱者として被災地を歩き続け、震災復興構想会議の場で提言を重ねてきた赤坂さんと、〈東北学〉発信基地として出版活動をするなかで被災し、活動を再スタートさせた土方さん。本誌では、震災2週間後の緊急対談を、特集「大震災 いま何を思えばいいのか」(2011年5月号)で掲載した。東北を歩き続ける2人に、この2年を振り返ってもらった。

## あの日から

**土方** 庄内空港から山形に入った赤坂さんと鶴岡市で合流したのは二〇一一年の三月二十九日でしたね。僕らが仙台市から山形市に一時避難していたところでした。**赤坂** 山形空港は確かもう再開していました。ところが仙台空港が閉鎖されていたために、山形空港から宮城県に入ろうとする人たちが山形便は満席でした。そこで、同じ山形県でも日本海側の庄内空港に飛んで、鶴岡で土方くんたちに会ったんです。

**土方** 鶴岡駅前であつたら『望星』の対談をやるから何か話せ、と(笑)。

**赤坂** 僕はあるところまで被災地に入っていないんですけど、だからね。土方くんはフリーライター時代に雲仙普賢岳の噴火や奥尻島の津波、阪神・淡路大震災など災害取材に取り組んでいた。そんな土方くんが、いま被災地を見て、何を感じているのかが聞きたかった。あのかきは鶴岡で土方くんたちと別れてから日本海回りで福島県立博物館に行った。本格的に被災地を歩き始めたのはあれからでした。